

「諏訪藩に伝わる『鷹書』の翻刻と注解」

『鷹之書』大―(三)―

代表 堀内 勝*

メンバー

大橋 和 華**

小瀬 園 子***

箕浦 芳 浩****

(五十音順)

Verification, Translation and Notes of
“The Large Book on Falconry”
Transmitted Through the Suwa Method
(2nd Part)

Masaru HORIUCHI *

Waka OHASHI **

Sonoko OSE ***

Yoshihiro MINOURA ****

解説

今回の扱うテーマは、前回に引き続き大物捕りの鷹についてである。第22節 鶴雁鷹の肉合出来しほ見立様口伝之事九(または

十)ヶ条、第23節 鶴鷹にこりたる鷹捉せ様口伝 覚書之事三ヶ条、第24節 右三ヶ条を以捉さる 時又取せ様之口伝之事六ヶ条、以上の三節である。鶴や雁など、自分の体の倍以上の大物獲りをする大鷹がテーマであって、このことから鷹狩の究極の芸は、こうした大物獲りを如何に成功させるか、及びその維持にあったことが分かる。網掛けで捕らえた鷹は、既に実獵の経験があり、大物の怖さを知っているために襲おうとしない。従って巢鷹を使って大物獲りを行なう。巢鷹は雛のうちから人間に育てられ、訓練されているため大物の怖さを知らない。言わば「身の程を知らない」ために調教次第では大物にかかってゆき、大物用鷹になるのも可能なのだ。第22節では大物を狙う鷹の外見の特徴、即ち観相が述べられる。タカの羽毛の下の肌色は羽毛を左右に分ければ地肌が見える。地肌は黒く青く紫色に見える、日面では赤色に、日陰では黒色に見えるのが良い、しかし一日の中に二度・三度と微妙に変わるから良くその色を見ておくことなどと述べられている。

第23、24節では大物にかかったがそれにこりてしまった大物獲りの鷹を再びかからせるにはどうしたら良いかが、こと細かに述べられる。

*国際文化学科 (Department of Comparative Cultures)

**元人文教室 現非常勤講師 (Part-time Lecturer, Former Department of Liberal Arts and Sciences)

***元非常勤講師 (Former Part-time Lecturer)

****吉田流鷹匠 (Falconer, the Yoshida method)

おそらく秘伝中の秘伝であろう。鴨や鳥など小さな物で「こり」をほぐし、雁にどう反応するかをみ、猟欲が出たら「おだしき雁」などをターゲットに慣らしてゆくなど合理的であつて、現代人でも合点のゆく所が多い。秘伝とされるのは矢張り、餌付けについてであろう。鷹を熟知し、失敗を伴った経験の積み上げであるこうした秘情報を、部外者が入手するのにどれ程大変であつたかは、今回の原文末尾が雄弁に物語っている。

今回の分は原書二二六頁の中、36頁の9行目から49頁7行目までのおよそ5分の1終えた箇所までである。そして偶然の一致というべきか、今回区切った箇所には「第三巻」と明記されている。そしてまた、我々の翻刻作業結果も三回目である。巻一にしても巻二にしても、どこから始まりどこで終わったのか、その明らかな記述は一切無かつた。

今回「巻三終」の巻末の記述からさらに明らかになったことがある。この部分は荒井流の秘伝であり、恐らく荒井流鷹匠ではない者が豊前守に、20年後にはその孫藤七郎に逢つて懇望の末、相伝したものだという。そこで荒井流のこと、及び荒井流鷹書と本稿の内容との関係について一言しておきたい。

荒井流の系譜は〔図表1〕の如くである。開祖豊前守は前稿の図12で明らかなように信直、即ち彌津松鷗軒の門人であり、奥州の人であつた。彼は鷹術に関しての書を残し、『荒井流鷹書』一卷として伝えている。

開祖豊前守を継いだのはその甥荒井六郎左衛門である。この二代目も恐らく奥州で活躍していたものと思える。彼にも鷹書

を残していた跡があり、『荒井六郎左衛門之書物抜書』の二巻本がそれである。この書について『放鷹』四八九頁には以下のうに記されている。「序文に三冊とあれど永井吾之助より出したるは二冊にて、上巻には荒鷹をなつけ取飼のこと、餌の作りやう、小鷹のなつけやう、取飼、隼のなつけ方、鷗なつけ取飼のことを、下巻には鷹の十二の顔并に鷹の見やう等を記す。宝暦二年七月永井氏の写せる本。酒井氏の三巻之書の序は安永五年申立春の日付あり」。宝暦二年は一七五二年、安永五年は一七七七年である。

第三代荒井流を継いだのは荒井藤七郎である。彼は徒弟となつてゐるから荒井家血縁の者ではない。彼は無菴と号し、三代將軍徳川家光の時代慶安元年(一六四八年)幕府の御鷹方に召し加えられた。この藤七郎の代から江戸詰になったことが推測される。彼にも鷹術に関する著作があつた。『放鷹』四八八頁には、

「荒井藤七郎横澤和泉守鷹書之内大緒一、座敷鷹以下相木の鷹まで繫形十五種。書中通鷹とある繫形は大野丹助より差出候架鷹二幅常信筆とあるものと同じ。」と僅か二行にわたつてあるのみである。書名中の横澤和泉守とは荒井流の開祖豊前守と同時代人であり、彌津松鷗軒の他の弟子である(前稿図12参照)。彼自身横澤流との流派を形成したか明らかでなく、むしろ荒井流の中に座を占めたと云つて良い。というのも横沢和泉守の名は藤七郎のこの書の他にも、荒井流の代表的書物となつてゐる『荒井流鷹書』の奥書に同じく伝授者として彼の名が並記されているからである。

三代目籐七郎について気がかりな点がある。籐七郎と同時代（と思われる）平野流の三代目荒井修理之助のことである。前者は荒井家の血筋を引いていたろうことは、本文末の「豊前守孫子荒井藤七郎に逢」とあることから察しがつくのだが（これとも口述人の思い込みによる可能性あり）ともかくも徒弟であった。他方、後者は「平野」の氏ではなく「荒井」の氏である。二者の間で或いは跡目をめぐって何らかの事態があったことも推測される。

第四代目は荒井十兵衛であり、籐七郎の子であって景国と号した。第五代目はその子荒井十太夫であって、彼は幸国と号した。第六代目はその孫で高国と号したことが知られる。高国は「八代將軍の鷹狩に扈從し、射手として名あり」（『放鷹』五十頁）とある如く、吉宗の時代に活躍した「射手」とは鷹で射ることを言っているのか、實際弓の名手であったのか定かではないが、恐らく後者であつたろう。

荒井流の後継者の特徴は二代目から順に六、七、十、と数詞、それも六以上の数を名前に入れてあること、及び四代目以後二文字構成の号名の下の子が「国」をえらんでいることである。

さて、荒井流の鷹術及び鷹書と、我々が読み進んでいる『鷹の書』との関係であるが、幸いにして荒井流の鷹書が現存して我々にも容易に参照できる。すなわち『続群書類従』巻五百四十八として収録されている。大正十四年発行、昭和三十三年訂正三版、續群書類従完成會、第拾九輯中は、一八七頁までの前半が蹴鞠部で、一八八―五〇五頁が鷹部であり、その中、『荒井

流鷹書』は三七八―四五八頁の構成になっている。本稿と関連すると思われる項目を三つ選んでここに紹介しておく。

例1. 鷹に大物を狩らせるための方法として、「鷹に大物をとらせ度と思ふ事 薬には眞蛇肝を影干にして。さめにておろし飼也。同飼様朝五つ比に餌をかへば七つ比に飼也。右の生肝取様は。頭と尾とをふまへ。腹をたたせて。肝の上り下りを見て。腹をかきさき取也。此薬を飼て。くらき構に縻。五つかい鷹のいれるを本と飼也。薬を飼て次の朝生雀を一口二口宛薬を飼間かふ也。黒鴨は鷹のために大に嫌也。内もつかゆる。但五臓の腑に寄也。合せんとする時。鷹はうくとして可取気色なくば。もみ雀を二口三口飼也。猶秘也」（『荒井流鷹書』四〇一―四〇二頁）。文中「蛇」は「蛇」であり従って「眞蛇」とは「まむし」のこと。「縻」は「繫」、「内もつかゆる」とは「放鷹」六三三頁の「ウチツク」（鷹が尿すること）であり、「もみ雀」とは「雀の肉を紫色になるまでもんで鷹の食気のなき時に与ふ」（『放鷹』六五五頁）という餌のことである。

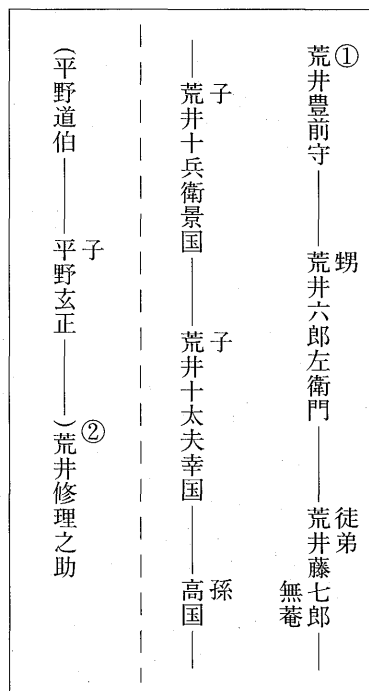
例2. 獲物の鳥にからなくなった鷹、及び獲物をかることを忘れてしまった鷹については、「鳥心無鷹の事並取忘の鷹取飼事 黒猫の頭。にわ鳥男鳥の影干。何も粉にして等分に合飼也。亦取忘の薬。りろ村くもの黒焼。等分にしてかふ也。亦大鷹ならば男のうろ子。雄ならは女のうろ子を取りて餌に包飼也」（『荒井流鷹書』四〇〇頁）。文中「りろ村くも」は不明、「うろ子」は（鱗）であり、鷹言葉では「鷹の趾脚の表面に生ずる鱗状物」を指す（放、六三四頁）。

例3。鶴狩用の鷹が鶴にかからなくなってしまった時、「鶴を取
べき鷹のとらざる事 但あつかいに寄て取也。薬には土がま
のはい。狐頭の黒焼。是を等分に合半錢飼也。但鷹の心をくせ
ば。五はつ草。をけんこし。たんばん。等分に合飼也。」(『荒
井流鷹書』四〇三頁)。文中「心をくせば」とは「怖(おじ)気づ
くならば」、「をけんこし」・「たんばん」の語句は意味不明。
「半錢」は一匁(もんめ)の半分、約二グラム。

上記の三例をみただけで想像がつくように、その多くは迷信
とか俗信、民間療法に類するもので、現代の科学的見方からす
ればマユツバものということになる。他の多くの項目もこれ
に類するもので「鷹書」なるものが、相手が動物、鳥であるだ
けに習性なり、観察に基づいた経験が加味された実証的なもの
と思いきや、それとはほど遠いことには驚かされる。一方では
こうした非科学的な処し方が何故そうなったのかを探ると、そ
れなりの理由もあることだろうし、それらの背景を探ることも
秘伝とも絡んで鷹術の内奥、イーミミックな世界が展開されて興
味深いことであろう。(文責 堀内)

以下の注解で(放)とあるのは『放鷹』(吉川弘文館、昭和五十八
年発行)の略である。

図表—1 荒井流の系譜



① 荒井豊前守に至る流派形成に関しては前稿「図—2」を参
照のこと。
② 荒井修理之助は平野流を興した道伯(同じく前稿「図—
2」参照)の子玄正より平野流三代目に列なる(「放鷹」五一
頁)。恐らく荒井流との関係があつたろう。

〔22〕鶴雁鷹の肉合出来しほ見立様口伝之事

① 一眼ちいさくて目の内黒く眼共すわりたるか吉。

一眼の内泪ぐみたる様に見えて後頂の毛を立、惣毛立さるかよし。

③ 一肉色ハ黒く青く見えて能心を付見るに疳ハ少赤様二見ゆるかよし。

一肉色黒く青く赤班二見ゆるも吉。是をみだれ色と云也。

⑥ 一紫色に見ゆる時、捉事有へし。

⑦ 一眼大きに目の真きるくとして目内かわきたる様に見

ゆる事悪し。

⑧ 一後頂の毛を立すしてうけかひの毛を立す惣毛をゆる

す事悪し。

⑩ 一鷹の気さしハ見る物毎にほしかる時ハ未肉まへなると心得へし。

① 眼ちいさくてマナコちいさく

て 黒目が小さい、即ち、虹彩の絞りがよく効く目。〔参考〕ハ

ヤブサ類は見立てが異なろうが、アラブ世界では、眼は大きいほど良く、「眼力」があるとされる。ベルグリンよりセーカーが

より好まれる理由の一つに、後者の眼がより大きいことがある。② 後頂コウチョウ 頭の最上部の後側。

③ 黒く青く見えて 血色の良いさま。白い色に近づく健康状態は良くない。

④ 疳 瘰(コウ)の略字か。瘰は喉の病氣。鷹の口の中はよく見えるので、喉を観察して病を知ることは多い。喉は白くなると良くない。トリコモナス(動物性鞭毛虫類)などが付いても喉は白くなる。

⑤ みだれ色 ばらばらで統一のとれていない色。「みだれ」を用いた鷹狩用語には、他に、乱餌、乱装束、乱符尾、乱足緒がある。

⑥ 紫色 肉色(血色)が紫色に見えること。俗に「どどめ色」と言う。⑦ きるきるとして 「霧る霧る」か。かすみ雲って。

⑧ うけかひ(受飼) 鷹の下嘴の下をいふ(放)。また「受飼の毛」はウケラゲとも言う。

⑨ ゆるす ゆれさせる。

⑩ 未肉まへイマダシンまエ まだ実獵及び調教に必要な体重調整に至っていないこと。

〔23〕鶴雁狩りに仕立てた鷹の肉付きや獵欲の出来具合見立て方について口伝のこと

一、目全体は小さめで、瞳孔は黒く、虹彩ともども座ってみえるのが良い。

一、黒目の内が涙ぐんだように濡れて見え、頭の後ろ側の毛を立て、全体の毛は立たないのが良い。

一、皮膚の色は黒く青く見えて血色が良く、氣を付けて見ると口の中は少し赤く見えるのが良い。

一、皮膚を通して見える肉色は、黒く青く赤まだらに見えるのも良い。是をみだれ色と言うのである。

一、血色が紫色に見える時、鶴雁を捉る事もある筈である。

一、黒目が大きく、目の芯が曇っていて、目の中が乾いているように見える事は悪い。

一、頭の後ろ側の毛を立てないで、嘴の下を立たず、身体全体の毛を揺れさせる事は悪い。

一、鷹の気持ちが見る物ごとに欲し

図表-2 箭像尾鷹→矢形尾鷹。
矢形尾については①話注②⑤((一)の八頁)。



『仁義理古武志』十五頁

一鷹のいれもやみ鷹靜に成て真^①に見ゆるに、日面^②に据廻し
日を受けて見る時は肉紫色ハ赤と見ゆる物なり。日裏
に据廻し見れハ黒色に見ゆる物也。裏と日面ノ見立を
能々心を付て分別し見る事專一なり。我鷹に依
らず人の肉当たる鷹杯を能見覺えて我心に切掛^④
をして見る時、鷹肉違ひたるか又ハ鷹のあてかひ違

- ①真^①に 本物に、即ち、真に獵用
訓練に向くようになること。
②日面^② ヒオモテ 日光の当たる
側。ひなた。日裏と対。
③裏^③ ウラ 日裏のこと。
④人の肉当たる鷹^④ ヒトのシシア
テたるタカ 他人が餌を調整し
て、ほどよく育てた鷹。
⑤切掛^⑤ キリカケ きざむ。切り
つける。念を押してみる。問い
かけてみる。

がる時は、まだ実獵のための体重調
整をする時に至っていないと心得る
べきである。

一、鷹の餌を欲しがって騒ぐ時期も
終わり、鷹が静かになつて獵時に見
える時、日当たりの良い所へ据え廻
して、陽を受けて見る時は、血色の
紫色は赤と見えるものである。日の
当たらない所に据え廻して見れば、
紫色は黒色に見えるものである。日
陰と日向の見立てをよくよく気を付
けて分別して見る事が専ら大切であ
る。

自分の仕立てた鷹に依るのではな
く、他人が餌を調整して仕立てた鷹
などをよく見覺えて、自分の心に刻
みつけて見る時、鷹の肉づきが違つ
ているか、又は鷹の餌の当てがいが
違っているかと、よく見分けて、人
の鷹で見覺えたものは後まではずれ
ないものである。であるから、他人
の鷹の扱い方を見分けて、自分の知
識とするべきである。

おおよそ鷹の肉付きや血色は一日
のうちに二度三度替わるものである
から、よくよく鷹の体調を見る事が
専ら大切なことなのである。

たるかと能見分て人の鷹にて見覚えたるハ後まてはづれす。人の鷹の相しらひを見分て分別すべし。

¹⁶惣別鷹の肉相色相ハ一日の内に貳度三度替る

物成に依て切々肉色を見る事専なり。

右之拾ヶ条¹⁸を能々分別して見覚るにおゐてハ

鷹の肉合出来しほの見立、少も違へからず。此上ハ

疑なく能見分可申事肝要也。此口伝書ハ人に

不可伝。²⁰一段秘事大事也。

²³鶴雁にこりたる鷹捉せ様口伝覚書之事

一鶴雁にこりたる鷹の相しらひハ先鳥屋出に鴨烏

二ツ三ツ斗程とらせ、其後は鷹の肉相を何の鴨

烏習する肉よりも少し⁴のためにして、七日八日も鴨を据

廻る内に、いかやうに物をほしかり候共、習へからず。其内に

¹⁶惣別ハソウベツ おおよそ。大

体。すべて。

¹⁷肉相色相ハシソウシキソウ
胸肉の付き具合や体色の様子、
即ちこれらは体調の指標となる。

¹⁸拾ヶ条 九ヶ条しかない。第九
条の後半「我鷹に依らず……」
以下が第十条に相当するもので
あろう。

¹⁹違へからずハタグウベからズ

間違ふことはいはずである。

²⁰一段ハイチダン 一層。ひとき
わ。

¹こ(懲)りたる鷹 ひどい目にあ

つて、二度と鶴や雁などの大型
鳥は捉るまいと思つてしまつた
鷹。鶴を掴んで池に落ちたり、
嘴で手痛く突つかれたり、翼で
打たれたりなどの辛い経験をす
ると鶴を捉らなくなる。懲りた
鷹は扱いにくい。こうした悪癖

のない鷹を「丸い鷹」と言う。
²先鳥屋出にハマズ・トヤダシに
まず毛の生えかわりが終わつ
て、鳥屋から出す時に。

³何の鴨烏習する肉ハイズレのカ
モ・カラスアワするシシ どん
な鴨・烏を狩らせる時の肉付き。
普通は通常体重の七五パーセン

トの肉付きで習せる。
⁴少ししたハスコシしたため 少し
下め。少なめ。

右の拾ヶ条をよくよく認識し見
覚えるにおいては、鷹の肉付き
や獵欲の見立てを少しも間違え
ることはいでであらう。此の上
は疑いなく、よく見分け申すべ
きことが肝要である。此の口伝
書は人に伝えるべきではない。
一層の秘事大事である。

²³鶴雁を狩るのに懲りてしまつた
鷹が再び大物捉りをするように
させるやり方の口伝・覚え書の
こと

一、鶴・雁のような大型鳥を狩ること
に懲りてしまつた鷹の扱い方は、まず
毛の生えかわりが終つた鳥屋出しの
時に、鴨や烏を二、三羽ほど捉らせ、
其の後は鷹の胸肉の張り具合をどんな
鴨や烏に習せる時の肉付きよりも少し
少なめにして、七日八日も鴨を狩らせ
るように拳に据え廻る内に、どんな様
子で物を欲しがるかがあつても習わ
せるべきではない。その内に、鶴雁の
肉で餌となるものが有れば、餌がきに

鶴雁の飼口あらは餌かき三ツ斗飼たるよし。飼口さへ

あらは此仕掛の内に二三ッ度斗も飼へし。又ふるまい

過たるも悪シ。扱其後ハ能時分と見付たるにおゐてハ

いかにも能餌を拵て餌かき四ツ五ツ斗程常の当餌

よりも大切に作り其餌^⑦だけざるやふに白く青

く見ゆる程に洗イカニモしるくとして喰へし。

扱明くる日に鷹の出来しほ次第に習する也。しほ

合見えざる時ハ口伝のいきあひを以仕掛、鷹の気色

を能々見合て習へし。

一雁にこりたる鷹ハ能肉を当、肉相能時分と見付

たるにおゐてハ、一寄も二寄も習て、先鷹のふりを

見分て捉羽か斗参るか、又ハ懸際までにて置か、余

の鷹に雁を習せて其飼口温なる内に物陰に

持て廻り、我身の鷹に見えぬ様に隠れて十間斗程

⑤能餌を拵てヨキ・エをコシラ

エて ちようど良い餌を作つて

⑥大切に作り 大切に、吸収が

良いように細かくたいて作り

⑦其餌^⑦だけざるやふに 餌肉の

形が砕けないように。この餌は、

やわらかく作つてあるので、壊

れやすいのである。

⑧しるしとして 汁のように、

容易に飲み込み得るものとして

⑨喰へしクワスベし 食わせる

べきである。

⑩いきあひ(息合) 鷹匠と鷹との

タイミングの取り合い。

して雀三羽分ほど飼うのがよい。餌さ

え有れば此の仕掛のうちに、二、三度

ばかり飼うべきである(こうしている

うちに、鶴雁の味を覚えていくのであ

る)。又、餌のやり過ぎも悪い。

さて、其の後は、良い時分と見え

た時にはいかにも良い餌を拵えて、

餌がきにして雀四、五羽ほど、いつ

もの調整用の餌よりも大き目に餌肉

を切つて、吸収が良いように細かく

たいて作り、其の餌がくだけない

ように気をつけて、白く青く見える

ほどに洗い、汁のように飲みこみや

すくして食わすべきである。

(8)

間を置いて雁斗を付、あしはためかして見する也。¹⁶

鷹ほしかる共先一度も二度も扣て三度め斗に投¹⁷

出して所つかせ、其雁の飼口温かなる所を雀貳ツ斗程¹⁸

喰せて押込さる内に習へし。此あてかひハ其日¹⁹

の内に捉するあてかひ也。少々こりたる鷹ハ此仕掛にて

必捉物也。

図表—3

こゝろで捉つ斗ふ。又ハ懸座す。こゝろ余
の鷹ハ居を喰せ。こゝろは温なる内ハ物陰
あて。こゝろ我々の鷹ハ入。ぬ板お隠れてする斗程
る。こゝろ鷹斗を付あ。こゝろ鷹斗を付あ。こゝろ鷹斗を付あ。
鷹斗。こゝろ鷹斗を付あ。こゝろ鷹斗を付あ。こゝろ鷹斗を付あ。
出して。こゝろ鷹斗を付あ。こゝろ鷹斗を付あ。こゝろ鷹斗を付あ。
喰せて押込さる内ハ雀貳ツ斗程

一右の日、雁なくして習する事ならさる時ハ、雁の胸を

四ツ五ツ程そきて常の当餌のこづくに作りて三度斗²⁰

¹⁹ 押込さる内に「オシコマザるウチに」呑み込まないうちに。鷹がもう少し食べたいと思つている時に、すり換え、引き移しに²⁰ あてかひ(宛行) あてがい。取り計い。心くばり。配慮。

²¹ 四ツ五ツ程そきて「ヨツイツツホド・そぎて」雀にして四羽か五羽に当たる分くらいそいだ状態で。

²² 常の当餌「ツネのアテエ」通常の、鷹の肉を維持するために少しずつ与える餌。雀にして四、五羽分の量。

²³ なましほり ゆるく、柔らかくしほり。しほと餌は柔らかくなり、消化がよくなるため、鷹は腹がへり、翌日、獵欲が出る。

²⁴ おたしき「おダしき」おだやかな。穏和、穏健である。

²⁵ 二寄三寄も「フタヨセミヨセ」もここでの「寄せ」は習せる回数²⁶ の助数詞ではなく、じわじわと近寄つていくと言つた副詞的意味と取る。「付廻し」にかかる。呼び水として与える餌。この場合は雁の肉。小指大、梅干し大の量。

り間を置いて、雁だけを縛り付け、足をばたつかせて鷹に見せるのである。鷹が欲しがつても、まず一度や二度は控えて、三度目ほどに雁を鷹の前に投げ出して急いで襲わせ、その雁の温かなところを雀にして二羽分ほど食わせ、鷹がもう少し食べたいと思つているうちに、引き移しに習せるのがよい。この取り計らいは、その日のうちに捉らせるやり方である。少々懲りただけの鷹は、この仕掛けで必ず捉るものである。

一、右のように仕掛けた日に雁が居なくて習せる事が出来ない時は、雁の胸肉を雀にして四つか五つくらい分量そいで、いつもの当餌のように作つて、三度ばかり箸で振り洗ひして、ゆるく絞り、鷹の腹にたまらないようにして飼うのである。さて、また明るる日の扱い方は、早々から野据えに出て、鷹の気色をよく見分けて、よい潮時と見た場合には、いかにも穏やかな雁に対して、まずじわじわと近寄つて、その雁が飛び立たないように付け廻して見せる。そのうちに、鷹がその雁をいわずに欲しがらうであれば、梅干し大ほどの丁度良い大きさの雁の肉を呼び水の餌として拵えて、一度も二度も食べさせて、その引き移しで習わせるのである。また鷹が雁に目を付け

箸にて振洗てなましほりにして飼なり。扱又明日ノ

相しらひ早々よりも野据に出て、鷹の気色を見

分て、能時分と見付たるにおゐてハ、いかにもおたしき²⁴

雁を先二寄三寄も其雁立ぬやうに付廻シて見する

内に、他念なくほしかる心あらハ能口餌を拵て一度

も二度も飼て其引移を以習する也。又鷹の雁を

も見つかぬ内ハ口餌をも飼へからず。口伝有。²⁷

右の仕掛けを以大形の物こりしたる鷹ハ取也。この上ハ

疑なく能分別して鶴雁にこりたる鷹の当かひ

専也。此三ヶ條の通りを常の心掛分別して仕掛る

におゐてハ物こりしたる鷹手間も不入、取飼へし。

心持大事なり。

24 右三ヶ條を以捉さる時又取せ様之口伝之事

27 見つかぬ 狙わない。目をつけない。

28 物こ(懲)りしたる鷹 獲物を狩ることに懲りこりした鷹。丸くない鷹。

① 肉開ハシシヒラキ 筋肉の詰めを開く。たくさん食べさせて筋肉を作らせる。鷹に与える餌によつて肥瘠させる仕方のうち、量を増すこと。対は肉詰(シシツメ)。他に「肉を上げる・下げ」なども言う。

② 当詰ハアテツメ 筋肉を詰めるために鷹に餌を少量与えること。普通は七割五分程度の詰めで獵をさせるが、ここでは一層飢餓感を与え獵欲を出させるために七分の下目に詰めるべく当餌をしているのである。

③ 不審成所於有之ハハフシンナル トコロ・コレアルニオイテハ 病気が疑われるようなところの有る場合は。肉を詰める飼いは病気のある鷹に行くと、体力を落とし過ぎることになり、時には死に至ることもあるからである。

ないうちは呼び水的な餌をもやるべきではない。これについては口伝がある。

右の仕掛けで鶴や雁のような大形の鳥に懲りた鷹は取るようになるのである。この上は疑いなくよく分別して、鶴・雁に懲りた鷹の手当てを専念するのである。この三ヶ條の通りを常の心掛けとして分別して仕掛けると、大物獲りに懲りた鷹も手間は入らず狩獵をするだろう。心持ちが大事である。

24 右の三ヶ條の仕掛けで臨んでも大物を取らない時、また取らせ方の口伝のこと

一、大型鳥の狩獵に懲りた鷹を餌飼いすることは幾日かかっても日を限つたりはしない。成りゆきにまかせて飛ばせてみて、そのうちに鷹匠の考えでたくさん食べさせて、胸肉の触診の具合で餌を与えていくのである。鷹の筋肉の様子については、(普通は七割五分程度の減量にするのであるが、このような懲りた鷹においては)七割二、三分まで瘠せさせてから、鷹の飛び方をよく見分けて、丁度良い潮時と見及んだ時にあの秘事の口伝の餌を飼うべきである。

図表—4

雨中の鶴狩二景。前景では、右端で放った鷹、鶴を捕えて縄張りされた野菜畑に突込む。後景では、左より馬の歩みに隠れて刈田の中の鶴の群に接近。
河鍋銅郁「絵本鷹かがみ」36頁



④ 持越スモチコス 餌を消化できない。餌を押し込まない。糞で見分ける、消化した糞が出て来ないのである。

⑤ 振廻るフリマワる 拳に乗せて据え回す。

⑥ 押込へし オシコムベし 呑み込み消化するだろう。23—19 参照。

⑦ くらめて くつろがせて。

⑧ 振出しフリダし 手に据えて表に出し。

⑨ 顔に水を霧のこくに吹掛け 鷹の顔に水を霧のように吹き掛け。顔や体に水をかけると鷹は落ち着くのである。

⑩ 出さまにイダシザまに 出すとすぐに。

⑪ 息相を仕掛けてイキアイをシカけて 鷹匠が鷹に息を強く吹き掛けて。

⑫ 気色を能々見分けキシヨクをヨクヨクミワけ 鷹の気分をよくよく見分け。息を吹きかけた時、鷹が尾をつぼめるのは駄目、知らぬ顔をするのが良い。

⑬ 残る所なく 十分に。

一、右の口伝の餌飼いをするに、その時には、まず鷹が無病であるかとよくよく念を入れ見分けて、少しでも鷹に病気の疑われるようなところの有る場合は、このような餌のやり方をしてはいけない。

さて、一方、鷹が無病であると見たならば、口伝の餌を拵えて飼うべきである。その餌を与えて明くる日の昼頃までも、また昼過ぎまでも消化できないでいることがあるはずである。その時、皆人は鷹が餌を消化できないのを見て驚き心配するだろう。しかし、どのように人が言っても驚かず、早々より鷹を拳に据え出し、野に出て据え回すうちに、その餌を呑み込み消化するだろう。その時また家の内へ据え入れ、暫くくつろがせて、なまぬるい湯を二度ほど飲ませて胃を整えるべきである。

一、その後に鷹を拳に据えて表に出し、顔に水を霧のように吹き掛け、少しの間、架に繋ぎ、さて、また野に連れ出すとすぐに鷹匠が鷹に息を吹きかけて鷹の気分をよくよく見分けて、十分に潮時と見立てた時に獵のために野に出すべきである。

一大物にこりたる鷹取飼様の事、幾日成共日を定す。

成次第に習て其内に智慧にて肉開をして肉の当る^①

ことくに取飼なり。鷹の肉相の事ハ七分の下目に成程

に^②当詰てから鷹のふりを能見分て能時分と見及

たるにおゐてハ彼秘事の口伝の餌を飼へし。

一右口伝の餌を飼に、時、先鷹無病成かと能々念を

入見分て、少も鷹に不審成所於有之ハ口伝の餌を^③

飼へからす。扱又鷹無病成かと見付候ハ、口伝の餌を

拵て飼へし。彼餌を飼て明る日の昼時分迄も又昼過

迄も持越ス事有へし。其時皆人餌を持越たるを見^④

て驚くへし。いか様に人申共驚す、早々より据出シ野

に出て振廻る内に其餌を押込へし。其時又家の^⑤

内へ据入暫くくろめてなまぬる湯二度斗飼へし。^⑦

一其後に鷹を振出シ顔に水を霧のことくに吹掛けて^⑧

^⑭二寄も三寄も^⑮に同じ。

^⑮一^⑯参照。ヨセル^⑰寄。鳥へ近づくと。初めて羽合するを初寄といふ(放)。こうした場合の寄せ方には「千鳥寄せ」などがある。

^⑰をたしき^⑱オダしき^⑲「おたしき」と同じ。

^⑲「雁をして」と「肉相も」の間に、書写中に一行または一枚分ほどの脱文があつたか。「雁をして」の後に「習すなり」「狩らすなり」などの語を補わないと意味が通じない。「肉相も」の前にも何か無いと文脈的に唐突である。図表15 傍線部の前行末尾参照。

^⑲し(痴)れたるれにして「しれたる様にして」の書写段階での誤字か。同じく図表15の傍線部参照。ぼんやりと緊張感を欠いた状態で。筋肉の仕上がりが、はかばかしくないようである。

^⑲いれて 欲・獵欲が出て。イレ^⑳鷹の餌を欲しがりて飛び騒ぐをいふ(放)。

^⑲吉雀^㉑ヨキ・スズメ 生雀と大差ないようなまだ温かみのある雀。健全な雀。

^㉑二ツの両胸 二つの両方の胸。ふつう胸と言う時は片胸を指す。雀の片胸の肉は10、15グラム程度。ここでは雀の胸肉の一羽分を指す。

^㉑二ツ付程 二ツ胸程。両胸ほど。二ツ胸迄^㉒フタツムネ・マデ

一羽分まで。多く食べさせることは獵欲不振につながるのである。こうした問題のある鷹の場合は一羽分まで、梅干し二つ程度の量が限度なのである。

一、右のように仕掛けた鷹の習せ方は、いかにも穏やかな雁の近くをまづ、じわりじわりと、その雁が飛び立たないように気をつけて付け廻し見せる内に、鷹も雁に氣付いて雁に氣持ちが向くようになるものである。付け廻してみても、通り過ぎる時、鷹が雁に名残りを惜しまないうちは、習すには未だ早すぎると思ふべきである。

跡を見帰り、雁に名残りを惜しむ心があれば、よい潮時と心得て、いかにも穏やかな大人しそうな雁をめぐらせて習せるのである。胸肉の緊張度も悪く、獵欲も見えない時は、何鳥でもいいので活鳥を拵えて、足をくくり、二、三間ばかり鷹に距離を置いて見せるのである。

この仕掛けで、鷹の筋肉の仕上りの善し悪しをじっくりと見分けるべきである。よくよく考えて見るべきである。

少の間架に繋、扱又野に出さまに息相を仕掛けて鷹^⑩

の気色を能々見分て残る所なく能時分と見付る^⑬

におゐてハ野に出へし。

図表—5

一たのしく仕掛たる鷹を鷹のまゝいふとたし^⑭死
唐の題きを二寄も三寄も其雁立たぬやうに付廻シ見
する内をまりうの鷹雁も名残を惜め内ハまた
しきと心得へし。跡を見帰、雁に名残を惜む心あらハ
能時分と心得ていかにもをたしき雁をして肉相も^⑮
鷹の近きを先二寄も三寄も其雁立たぬやうに付廻シ見
する内に、付まハリ候時、鷹雁に名残を惜め内ハまた
しきと心得へし。跡を見帰、雁に名残を惜む心あらハ
能時分と心得ていかにもをたしき雁をして肉相も^⑮

一右のここと仕掛たる鷹雁様の事いかにもおたしき

②③ 如斯成鷹ハカクノゴトクナル・
タカ このようである鷹。

②④ 煩出るハワズライ・イズる 病
気か何か、身体に支障をきたし
ている。

②⑤ うかり 「憂かり」か「うつか
り」か。気が抜けて、ぼんやり
している様。

②⑥ 頓てハヤガて そのまま。すぐ
に。

②⑦ 内を上て 「肉(シシ)を上(ア
ゲ)て」の誤写か。肉付きを良く
して。栄養を十分とらせて。

②⑧ 三ヶ条 六ヶ条のはずであるこ
ころが三ヶ条となっているのは
注①⑥の部分に脱文があったこと
の証となろう。この三ヶ条は、
体調を崩して、ぼんやりとして
しまった鷹の見立て様に関する
ものであり、それ以前の鶴・雁
など大物捉りに懲りた鷹の矯正
法とも言ふべき条とは内容的に
も大きく異なるのである。

②⑨ 不思議ソ 不思議トゾか。いぶ
かしいことと思つて。

③⑩ 所ノハトコロノ 所定の。いつ
も鷹を止める所の。

一、さて、また鷹が活鳥を見て、い
かにも欲しがつて飛び騒いでも、ま
ず一度、活鳥を鷹から離して、口餌
も飼わずに少し間を置き、また活鳥
を見せて、二度目に鷹の獵欲を見合
わせてから、獵に向けて少しずつ与
える餌をやるべきである。

この時の口餌には、生雀か殺した
ばかりの雀ならば二羽の両胸をむい
て血の出るところを飼うべきである。
生きている小鳥が無い時は、いかに
も新鮮な小鳥を二つ胸ほど口餌に拵
えて、懐に入れ温めておき、骨や毛
を食わないように、この一羽分の胸
肉を食わせるべきである。

鷹の様子に合わせた仕掛けは大
事なことなので、少々欲しがり方
では与えないのである。これは一層
の秘事である。

①¹⁷ したるれにして出来しほも見へさる時ハ、何鳥にて

も生物を捨て足をく、り、二三間斗程間を置いて見

する也。此仕掛を以鷹の肉善悪をとくと見分

へし。能々分別して見るへし。

一扱又鷹生鳥を見ていかにもいれてほしかり候共、先一度生

物を取はなちて口餌をも飼すに少間を置いて又見せ

て、二度めに鷹のいれ口を見合て口餌を飼へし。此時

の口餌にハ生雀か吉雀ならは二ツの両胸をむきて血の

出る所を飼へし。生たる小鳥なき時ハいかにも鮮き

小鳥を二ツ付程拵て、懷に入、温めて置、骨毛を喰ヌやう

に二ツの胸迄を喰すへし。相しらひ仕掛ハ大事の事なる

に依て少々の時にハあてかわぬ也。一段秘事也。

一如斯成鷹ハ煩出る時鷹の心替る物成に依て、其時

心を付て能見るに、煩出る鷹ハ先一旦ハほしかり候ても

③¹⁸ 能タリヨクヨク よくよく見れば。「見れば」を補う。

③²² 荒井豊前守 鷹の流派の一、荒井流の祖。『放鷹』50頁に「荒井豊前守は奥の人、瀬津松鷗軒の門人にして鷹の傳書を著す。その甥六郎左衛門斯術を好みその業を襲ぐ。六郎左衛門の徒弟荒井藤七郎無菴と號す。」とある。解説を参照。

③²³ 終ニ相伝不仕候ニツイニ・ソウデン・ツカマツラズ・ソウロウツいに伝え継げませんでした。以下、著者の荒井流放鷹術を会得するまでの経緯・苦勞が綴られる。当時の子弟関係・秘伝伝授の様子が知られる。

③²⁴ 荒井藤七郎 注③参照。『放鷹』50頁、注③引用部分に続いて、「慶安元年徳川幕府の御鷹方に召し加へらる。荒鷹小鷹隼鷗のなつけやう並に取飼に關する一書を録す。」とある。著者が荒井藤七郎から、この部分の秘伝を伝えられたのは、慶安元年(一六四八年)以前であらうか。解説も参照。

一、このように痴れたようになった鷹は、体調が崩れる時、そのために鷹の心が替わつたものようになるものである。それであるから、その時、気を付けてよく見ると、病氣などの出る鷹は、まず一旦は獲物を欲しがつても、次第に欲しがる心も弱くなつて、涙ぐんだように見えて、様子も物憂くぼんやりとしていて、獲物を見せても、さほど名残りを惜しまない、そういう鷹は病氣などが出ると心得て、すぐに栄養をつけて養生をさせるべきである。

右の三ヶ条は鷹の気分も体調も何れも替わつたと思う時、じっくりと据え廻して、不思議だと思つて見ても何とも見分け難い時に試してみるべきである。この仕掛けで、鷹の様子は自然と見えてくるものである。いつもの架(ぼこ)につなぎ、気を付けて、よくよく見れば、自然と見えてくるものである。

次第二ほしかる心もよわく成て、泪くみたる様に見へて

様子も²⁵うかりとしてさのみ名残を惜まぬ鷹ハ煩出る

と心得て、²⁶頓て内を上て養生すへし。²⁷

右之三ヶ条ハ鷹ノ氣色何モ替リタルト思フ時ト²⁸

クト据廻、不思議ソ立見ルニ何モ見分難キ時²⁹

見ルヘシ。此仕懸ニテ鷹ノ様子見ユル物也。

所ノ架ニツナギ心ヲ付テ能々見ユルヘシ。³⁰

右此十一ヶ条之義ハ荒井豊前守二十ヶ年之間付³¹

廻リ種々懇望仕ルトイヘトモ終ニ相伝不仕候ニ付、其後³²

廿ヶ年計中絶。奥州會津ニ下リ豊前守孫子³³

荒井藤七郎ニ逢、色々懇望ノ上ニテ相伝仕。此心得³⁴

失念仕間敷ト思、私ノ心覚ノ為ニ藤七郎相伝之

口述人之通、書載ル者也。³⁵一冊ニ於テハ如何様之仁³⁶

所望スト云トモ不可相伝。一段之秘事也。³⁷

卷三終

³⁵口述人之通書載ル者也。コウジユツニン・ノ・トオリ・カキノスル・モノ・ナリ。口述人の語る通りに、書き載せたものである。著者は荒井藤七郎から相伝を許され、実際、藤七郎から伝授されたのであろうが、一方に、流派の秘伝を口承する口述人が存在したことは注目される。秘伝であるから口承されたのであろうが、それだけでなく、文盲率の高い時代に、巻物など文献以上に相伝における口述人の占める部分は大きかったものと思われる。

³⁶一冊ハイツサツ 著者(当時、書写加筆した人と言ふべきか)が藤七郎による荒井流の秘伝を記載した段階での本書が冊子であったことがわかる。本書は本稿本文末の「巻三終」や次回の分の文末にもある「巻四終」などの記載から見ても、また、各地に「狩の巻物」が存在することから見ても、原書は巻物であったものと思われ、巻物から冊子へと形を変えながら書承されたものと思われる。この冊子を最後に書写した人の見た本が、盛徳君が命じて書写させられたもので、水戸の一橋家に仕える鷹匠、松崎利八所蔵本であったことは本稿(「国際研究」一九九五年刊)で述べた通りである。江戸時代の初期に荒井豊前守に付き廻り、二十年を経て、藤七郎から荒井流の秘伝を苦勞の末に伝授され、本書に加筆した人物

右の、この十一ヶ条のことは、荒井豊前守に十ヶ年の間付いて廻り、いろいろ懇ろにお願い致すとは言え、終に伝えてもらうことが出来なかったもので、その後二十年ばかり中絶したことになる。その後、奥州會津に下り、豊前守の子孫である荒井藤七郎に逢い、いろいろ懇望の上、伝え継いだものである。

この心得をうっかり忘れてしまつてはいけないと思い、個人的な自分の心覚えのために、藤七郎相伝の口述人の話す通りに書き載せたものである。この一冊に関しては、どんな人が望んでも伝えてはならない。一段の秘事である。

卷三終り

³⁷如何様之仁ハイツカヨウ・ノ・ジンは、この『鷹の書』を書写し伝承した多くの人々の中でどう位置づけられることになるだろうか。興味深いところである。